（第３種郵便物認可）

自宅や車中も選択肢に

防災士・柳原さんに聞く

コロナ禍の防災 ④

2020.6.25

災害では「早めの避難」が鉄則だが、避難所での密集は、新型コロナウイルスの感染リスクが高まる。公的避難所以外の場所に避難する「分散避難」はどうすれば実現できるのか。防災士の柳原志保さん(47)＝和水町＝に避難先の選び方や注意点を聞いた。

柳原さんが挙げる避難先の候補は①自宅②知人や親戚宅③災害時に駐車場を開放している道の駅などでの車中泊④避難所⑤ホテルなどの宿泊施設―の五つ。「安全でトイレがあり、テレビやラジオなどで情報を入手できる場所。『3密』を避け、手洗いやうがいができることも重要」とアドバイスする。

避難先選びの前に、まず自宅や勤務先、学校など家族が普段過ごす場所の危険性を確認することが必要だ。各市町村のホームページなどのハザードマップで、浸水区域や土砂崩れ危険区域に指定されているかどうか調べることができる。

自宅などが危険区域の外にあり、浸水や土砂崩れが起きても逃げられる2階があれば、「自宅で警戒を続けることも可能」と柳原さん。電気や水道、ガスが止まった時のため、最低3日分の水や食料、カセットこんろ、懐中電灯などを備えておくと安心だ。

自宅などが危険区域だった場合は避難が必要になる。公的避難所はコロナ対策で1人当たりの空間を広く取るなどしており、収容人数がこれまでよりも少なくなるケースも。柳原さんは「避難先に行ってもいっぱいだった、ということが起こり得る。避難先の選択肢を多く持っておくべきだ」と強調する。

大人数の家族や乳幼児がいる世帯、1人暮らし高齢者などは避難先が限られてしまう。柳原さんは「近所の人たちと日ごろからコミュニケーションを取っておけば、万一の時、互いに情報の共有や避難の手伝いなど助け合える」と「共助」の重要性を訴える。

若く健康で少人数の場合、柳原さんが勧めるのが車中泊。「個別の空間が確保できて、移動も可能。避難物資を載せておけばスムーズに避難できる」のがメリットだ。

柳原さんは普段から水と保存食、最低限の衣類、救急・衛生用品などを車に積んでいる。今年は新型コロナ対策で「消毒用アルコールやマスクを追加した」という。夏場は車内が高温になるため、断熱素材のバッグがあると便利。熱中症やエコノミークラス症候群にも注意が必要だ。

柳原さん自身は自宅が浸水区域内にあるため、知人宅か、車中泊する予定という。「頼る側、頼られる側双方の負担を最小限にしつつ、自分と家族に合った避難先、避難の方法を考えてほしい」と呼び掛ける。

（國﨑千晶）

＝終わり

「分散避難」のポイント

消毒用アルコールなどを車に常備している防災士の柳原志保さん。車中泊のための布団も載せている＝８日、和水町